

(第 1 回 午前)

2020(令和 2)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50 分)

《注 意》

- (1) 問題は ～ まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に書いてください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに書いてください。
- (4) 解答用紙のみ回収します。
- (5) 解答に際して、句読点、符号などが含まれる場合には一字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 中 学 校

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

皆さんは今どのように生きているでしょうか。私は大学で一八歳以降の学生たちと二十数年接しているので、ある図柄ずがらが目に浮かびます。

一〇代の半ばから後半は、いろいろと難しい問題にぶつかります。まず、家族という枠わくの中から離れていく時期にあたります。自分という存在は、幼い頃から一〇代半ばまで家族の中で与えられてきたわけです。

I、自分の意思ではなく、成長の過程で、否応なく家族の輪の中から離脱りだつしていかなければなりません。名前について考えてみるとわかりやすいでしょう。

皆さんは二つの名前を持っています。「名字」と「名前」です。日本人の多くは、明治政府が成立する前は名字を持っていませんでした。江戸時代、武士以外の人々には名字と帯刀が許されていなかったからです。ですから、歴史的に見ると、名字はごく最近つけたものといえます。私の名字は「鵜飼うかい」です。日本の多くの川で漁法として鵜飼※1（ほんとうは「うがい」と読むのですが）が行われていましたから、職業にちなんでつけたのだとわかります。この名字は長良川とその周辺ちいに集中していて、父のルーツも愛知県です。皆さんの名字も、例外はあると思いますが、比較的最近につけられたものと考えてよいでしょう。

何を言いたいかというと、今この社会で生きている私たちは必然的に分裂ぶんれつしているということです。「名字の存在」として市民社会に書き込まれていると同時に、「名前の存在」として家族の中の一員として認められています。幼稚園や保育園では名前で呼ばれることのほうが多かったはずです。そして小学校からは名字で呼ばれるようになりますが、これは一つの訓練なのです。社会の中では名字という名前なまえで暮らすのだと。だから名字を漢字で書くようにもなる。しかし、家庭では名前で呼ばれますね。多くの人にとっては「名前で呼ばれる自分の方が安心していられる存在」だと思います。

しかし、一〇代半ば以降は変わります。家族の中で与えられていた自分という存在が希薄きはくになっていくのです。そこで「もしかしたら自分は何者でもないのではないか？」という疑問が生れます。「何者でもない自分」とは、すなわち「II」ということ。これはとてもたいへんなことです。誰もが通らなければいけない道だけれど、「何者でもない自分」と直面する

という^① きわめて危機的な状況が、一〇代半ば以降の人間なのです。

そこで、たとえば部活動で自分の居場所を見つけたり、個人的な将来の目標を見つけることで、その欠落を埋めるわけです。皆さんは、まさに今その作業をしている最中でしょう。

日本語には不思議な言い方がたくさんあります。「人」もその一つです。「一般的な^{いっぱんてき}「人」を指すこともあります」^②「人の振り見て我が振り直せ」の「人」は「他人」という意味です。家族という強固な共同体の中で自分の存在が規定されていた関係から外へ出ていくときに必要なことが「他人と自分を比べる」という作業です。

ところが、この作業には際限がありません。「相手が優れていて自分が劣っている」と「自分が優れていて相手が劣っている」の二つのパターンしか思い浮かばないからです。他人と自分という二つのことを比べるだけではダメで、第三者が出てきて初めて両者の関係がはっきりします。^③この試練からは人間として成長するにしたがって逃れられるのですが、おかしいことに国同士の話になるとそうはいかないのです。いつまで経っても^④大人になれない。

もう一つ考えたいのは、個人的な将来の目標はなかなか見つからないということです。^cシユウダンの目標は、たとえば硬式野球部なら「甲子園に出場する」といったように立てやすい。学校や部活動などは、家族の代わりとして、ある種の疑似家族的な^d空間をつくりやすいのです。しかし、個人の目標は見つかるまでにどれくらい時間がかかるかわかりません。

私が勤めている大学はいわゆる偏差値^{へんさち}の高い学校ですが、合格するまでが目標で、入学してしまうと「何をしたらいいかわからない」という学生がたくさんいます。日本のように受験がある国では、受験が一時的に個人の目標の代わりを果たしますが、ほんとうの意味での目標とは違うので^eタツセイしてしまうとぽっかり穴が空いてしまう。この点は、私の時代と皆さん^はの時代も共通していることかもしれません。しっかりとした目標を見つけられない限り、一〇代半ばからの試練^{しっくふく}を克服する作業はつづくと思っています。ご了承ください。

（『生き抜く力を身につける』所収 鵜飼哲「若さの歴史」を考える」）

※1 鵜飼…夏に、かがり火をたいてアユなどを引き寄せ、飼い馴らした鵜（＝鳥）を使つてとる漁。岐阜県長良川のものは有名。

問一 〰〰〰部 a ー e のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 空らん I にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のアーオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ さらに ウ また エ すなわち オ 一方

問三 空らん II にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のアーオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 有 イ 無 ウ 不 エ 消 オ 全

問四 — 部①「きわめて危機的な状況」とありますが、このような状況になるのはなぜですか。次のアーエの中からもつともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 成長と共に名字で呼ばれる環境に変わり、自分の存在に対する認識が希薄になっていくから。

イ 名字で呼ばれることは大人の仲間入りではあるが、名字では個性を尊重できないから。

ウ 歴史の中では名字を持たなかった過去もあり、名字への思い入れが少ないから。

エ 名字で呼ばれることは家族を意識することにつながり、行動のすべてに責任が伴うから。

問五 本文前半部（皆さんは今どのように生きているでしょうか。ー皆さんは、まさに今その作業をしている最中でしょう。）の内容にあうものを次のアーエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は、社会に出ると名前ではなく名字で認識されることが多く、その違いに混乱が發生し、自分の存在が理解できなくなる。

イ 人は、幼いうちは自分という存在を家族の中で与えられてきたが、成長して家族から離脱するにつれて、安心できなくなる。

ウ 人は、小学校に入学した当初は名字で呼ばれるようになったことを喜ぶが、次第に不安を感じるようになる。

エ 人は、名字で呼ばれるようになってからが本当の人間形成の始まりで、不安な中で関係性を築くことが何よりも優先される。

問六 ―― 部②「人の振り見て我が振り直せ」とありますが、その意味としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人の良いところはまねするべきである。

イ 他人と同じことをしてはいけない。

ウ 他人の振る舞いを見て自分の行動を正すべきだ。

エ 他人と協力することによって色々なものが見えてくる。

問七 ―― 部③「この試練」とありますが、何を指していますか。本文中から十六字で抜き出して答えなさい。

問八 ―― 部④「大人になれない」とありますが、「大人になれない」の主語を本文中から一字で抜き出して答えなさい。

問九 本文中では「目標」の大切さが述べられています。あなたが中学生になったら、学校生活の中でどのような目標を立てたいと考えていますか。その目標を立てようと思った理由を含めて、「中学生になったら頑張りたいこと」を八〇字以上一〇〇字以内で記述しなさい。一マス目から書き始めること。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文化祭の合唱練習の間も、みなもとマチは紙音しおんの家を何度も訪ねた。しかし、応対に出てくるのは最初の日と同じように、いつでも紙音のお母さんだけだった。

一学期の最初、マチの制服のしつけ糸を切ってくれたあの子は、今、一人きりの部屋で過ごしているのかもしれない。そう考えると、胸の奥おくがきゅつとなる。

「^①私、一人で行こうか」

マチが言うと、みなみがびっくりしたように「え」と呟つぶやいた。

「高坂さんの家なら、何度もみなみちゃんと一緒いっしょに行つたし、私一人でも大丈夫だよ。みなみちゃん、新人戦の準備で忙しそうだし、明日も朝練があつて早いんでしょ？」

「そうだけど、マチを一人で行かせるのは悪いよ。遠回りになるし」

みなみが断りかけたとき、思いがけず、背後から「私、行くよ」という声がした。振り返つて、驚おどろく。

ことほ
琴穂だった。

マチとみなみは思わず顔を見合わせる。そんな二人に向け、琴穂がさらに続けた。

「私がマチと一緒に行く。今日はバスケット部、陸上部ほど遅おそくならないと思うから、ちよつと待つてくれれば大丈夫だよ。私にまかせて、みなみは部活に行つて」

「助かるけど、でも」

みなみの声を遮さへぎるように、琴穂が^②すばやく首を振り動かした。

「みなみってさ、しっかりしてるのはいいんだけど、一人でたくさんのことを抱かかえこんでがんばりすぎるんだよね。そんなんじゃ、いつか参まゐっちゃうよ。——今年の新人戦、陸上部の他ほかの子に聞いたけど選手になれそうなんでしょ？」

みなみの顔にはとした表情が浮かぶ。琴穂がふう、と小さなため息をついた後で笑った。

「だったら、今はそっちががんばり時だよ。もっと頼たよつてよ。——これまで副委員長なのに全然頼りにならなかったのは、私が悪かったからさ」

言いながら、琴穂がマチを見た。「マチに仕事、だいぶ頼っちゃってたし」と決まり悪そう

に告げる。

「マチも、これまで、いろいろごめんね。私、^③部活を言い訳にしすぎてた。そんなこと言い出せば、みなみだって陸上部が大変なのに、委員の仕事したり、高坂さんの家、行ったりしてたんだもんね」

謝った後で照れくさそうに目を伏せた琴穂を前に、みなみがとまどうような表情を浮かべる。ややあつてから、^④おずおずと「いいの？」と琴穂を見た。

「頼^{たの}んでも、平気？」

「うん」

琴穂が胸を張って頷^{うなず}いた。

^⑤「連のやりとりを驚きながら見ていたマチの頬^{ほお}がゆるんでいく。「ありがとう」とためらいがちにお礼を言うみなみを、とてもいいと思った。

いつもしつかりしているみなみが自分たちを頼^{たの}ってくれたことが、嬉^{うれ}しくなる。

琴穂と二人で紙音の家に向かう途中、マチは改めて琴穂に礼を言った。

「さつきはありがとう。みなみちゃん、嬉しかったと思う」

横を歩いていた琴穂が、「だって」と笑う。

「みなみ、完璧^{かんぺき}すぎるんだもん。あれ、本人何でもないふうにやってるけど、結構大変なはずだよ」

「私も実はちよつとそう思ったことがあったけど、言い出せなかったんだ。琴穂が言ってくれてよかった」

「うーん。みなみ、たぶん、自分が無理してることに気づいてないんじゃないかなあ。自分のことって、かえってなかなか気がつけないよね。私もそうだったし」

琴穂が「ごめんね」と頭をかく。

「私も合唱の練習、リーダーなのにちゃんとやってなかった。マチに注意されてはつとしたの」「私こそ、あのときはキツイこと言っちゃってごめん」

あわてて謝ると、琴穂が「そう？」と首を傾^{かし}げた。

「全然キツくなかったよ。むしろ普段※」マチから言われるなんて、私、よっぽどだったんだなって反省した。——なんか、ありがとね。陰でこそ言うんじゃないで、面と向かって言ってくれたから、かえって気分よかったよ」

「そんな……」

頬がかあつと熱くなった。

——はつきり自分の意見が言えない性格を直したい。

今年の四月、マチが中学校に入学するにあたって目標にしたことだ。その一歩が踏み出せたようで胸の奥がじん、とあたたかくなる。

琴穂から本音の声を聞いたように思えたら、マチもまた、その本音にこたえなくなる。自分のことについて話してみたくなった。

「私ね、〃いい子〃とか、〃真面目〃って言われるの、少し嫌なんだ」

今も、琴穂から「普段」※「マチ」と言われたばかりだ。おとなしい、優しい、いい子。褒め言葉なのに、マチを息苦しくさせる言葉たち。琴穂がびっくりしたようにマチを見た。

「どうして？」

「自分の意見がはつきり言えない子だとか、面白くない、楽しくない子なんだって周りから思われてるようで、心配で」

話しながら、だんだんと胸のつかえが取れていく。絶対に人には話せないと思っていたことだったのに、^⑥言葉に羽が生えたようだった。琴穂は相変わらず驚いていたが、聞き終えて大きく息を吐き出した。

「ごめんね、私、マチのことたくさん〃いい子〃って言った。褒め言葉のつもりだったんだけど無神経だったね」

「ううん。私が気にしすぎるのも確かだから」

「勉強できる子は、悩みなんかないと思ってた。私、マチのこと羨ましかったんだ」

「ええっ？ 私こそ、琴穂は運動神経もいいし、友達も多いから悩みなんかないと思ってた」

お互いに驚いたものの、いつの間にか、一緒に笑っていた。

「本当は私、陸上部に入りたかったんだ」

マチはさらに思いきって言ってみた。

「今は科学部が楽しいし、入ったことは後悔こうかいしてない。だけど、四月の私は勇気がなくて……」

あ的时候は、琴穂に言われたことを気にしていたのだ。陸上部は練習が厳しいし、先輩たちもみんな怖いからやめた方がいい——、当の琴穂は四月に自分が言ったことを覚えてもいないだろう。^⑦ だけど、その言葉がマチの気持ちに歯止めをかけた。

案あんの定じよう、「ふうん」と他人事ひとごとのように頷いた琴穂が、しかし次の瞬間しゆんかん、意外なことを言った。

「陸上部かあ。確かにマチ、小学校の頃から長距離得意だったもんね」

「え？」

「マラソン大会や体育の時間に見てた。私は最初に勢いよく飛ばして後半バテるのに、マチは根気強いっていうか、ペースに乱れが全然ないんだよね。最初から最後まで自分のペースを守る。すごいなあって思ってたんだ」

^⑧ すぐに言葉が返せなかった。胸に、ある一文が蘇よみがえる。図書室で、見えない誰かが残した手紙。『がんばってれば、見てくれるかな。』

見てくれるよ。

胸の中で、呼びかけていた。見てくれる人は、必ず、どこかにいる。手をぎゅつと握にぎり締め、琴穂に向けて「ありがとう」とこたえた。

（辻村深月『サクラ咲く』）

問一——部①「私、一人で行こうか」とありますが、このときのマチの気持ちとして、ふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもみなみと二人で紙音のお見舞いに行っていたけれど、もう一人でも紙音の家に
行けるだろうという気持ち。

イ みなみが新人戦の準備でとても忙しそうなので、今日はみなみに無理をしてほしくない
という気持ち。

ウ ずっと学校を休んでいる紙音のことがすごく心配で、一人でもお見舞いにいききたいと
いう気持ち。

エ 一度、琴穂と話してみたいと思い、「一人で行く」と言えば琴穂がついてきてくれる
と期待する気持ち。

問二 ―― 部②「すばやく」とありますが、この言葉と性質やはたらきが同じものを次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 花が咲いてうれしい。

イ もうこれ以上老いたくない。

ウ 暑い夏が終わると、秋になる。

エ お母さんの笑い声が聞こえた。

問三 ―― 部③「私、部活を言い訳にしすぎてた」とありますが、琴穂の所属している部活動は何部ですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問四 ―― 部④「おずおずと」とありますが、この言葉の意味と同じ意味で使われている言葉は本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問五 ―― 部⑤「二連のやりとりを驚きながら見ていたマチの頬がゆるんでいく」とありますが、このときのマチの気持ちとしてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで頑張ってきたみなみと、身勝手だった琴穂がお互いを認め合い、助け合っている姿に喜んでいる。

イ これまであまりにもわがままだった琴穂が、ようやく改心してくれたため、少しずつ安心している。

ウ いつも完璧すぎるみなみが今日は自分たちを頼ってくれて、認められたことに感動している。

エ 琴穂とみなみが仲直りしたことで、ずっと心配していた二人の関係が深まってしまいい、嫉妬しとしている。

問六 本文中の ※ には共通の言葉があてはまります。本文中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

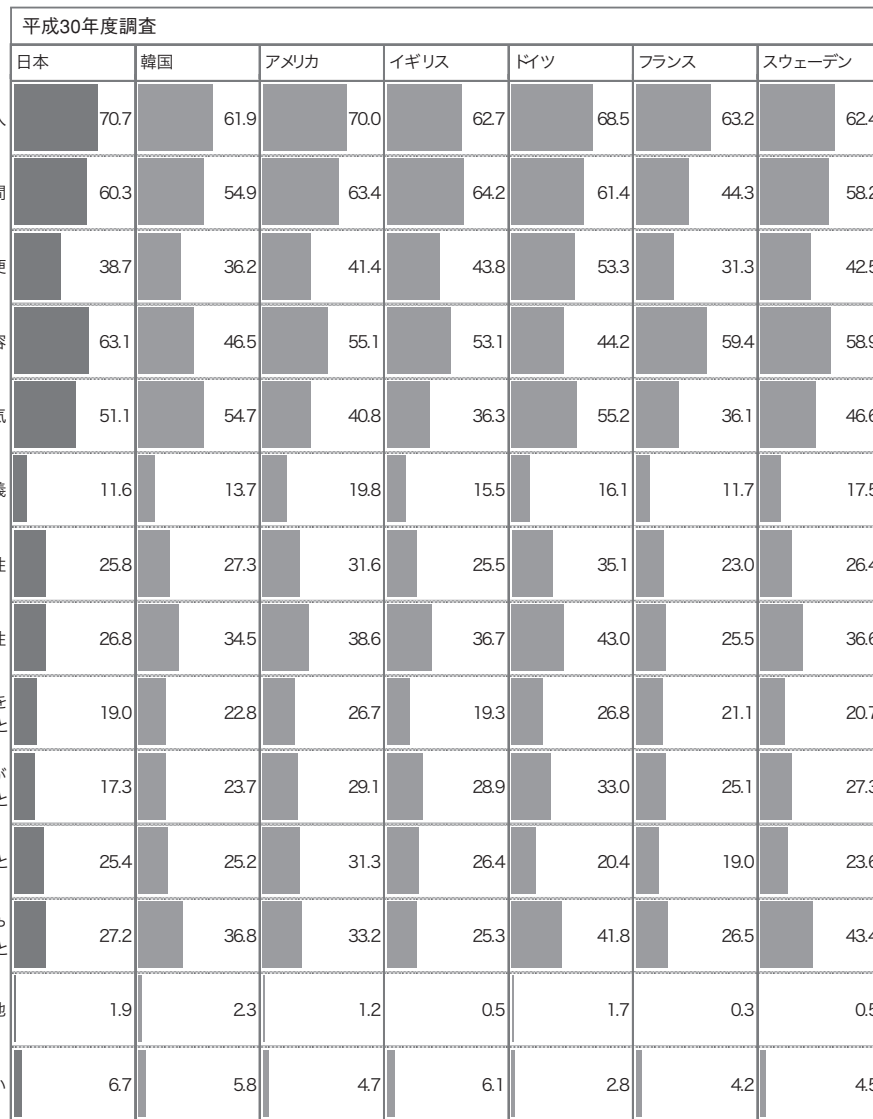
問七 ―― 部⑥「言葉に羽が生えたようだった」とありますが、それはどういうことですか。
マチの気持ちをふまえて、自分の言葉でくわしく説明しなさい。

問八 ―― 部⑦「だけど、その言葉がマチの気持ちに歯止めをかけた」とありますが、それはなぜですか。マチのかつての性格がわかる部分を探し、解答らんに合う形で十六字で抜き出して答えなさい。

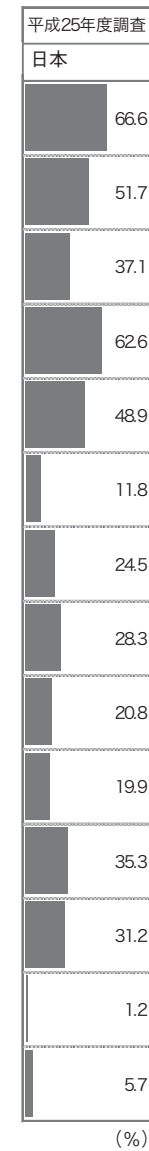
問九 ―― 部⑧「すぐに言葉が返せなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由を、マチの気持ちをふまえて、自分の言葉でくわしく説明しなさい。

三

次のグラフは、『平成三十年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』「職業選択の重視点」(内閣府)によるものです。資料Aは、平成三十年度の日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの結果、資料Bは、平成二十五年度の日本の結果です。グラフをよく読み、あとの問いに答えなさい。



資料A



資料B

問一 資料Aにおいて、日本の若者が、仕事を選ぶ際に、もつとも重視していることは何ですか。

問二 資料Aにおいて、仕事を選ぶ際に、「労働時間」をもつとも重視している国はどこですか。

問三 資料Aにおいて、仕事を選ぶ際に、「職場の雰囲気」を三番目に重視している国はどこですか。二つ答えなさい。

問四 資料Aにおいて、各国を比較して、仕事を選ぶ際に、「自分の好きなことや趣味を生かせること」を重視する割合がもつとも高い国はどこですか。

問五 資料Aと資料Bを比較して、日本において、五年前（平成二十五年度）より、重視する割合がもつとも高まっている項目はどれですか。

